

技 伝 承

W A Z A
D E N S H O

伝統的工芸品技術・
技法継承者育成事業



黒く見えるのが「脂(やに)」。銅板を置いて
打ち出していく。

見た目の豪華さと
立体的な造形美に
特徴がある。
脂ばんとは、松
脂や地の粉などを
混ぜ合わせた粘着

松脂の香りがほのか
に漂う工房に、鑿を打
つ金槌の小気味よい音
が響く。銑具師・津田
興世さんが中山裕晃さ
んに伝授しているのは、
「脂打出し」と呼ばれる
彫金の技法。火で熱し、
軟らかくした銅板(板金)
などを「脂ばん(台)」の
上に置き、裏面に描い
た図柄を鑿で打ちなが
ら、表面に模様を浮かび
上がらせるもので、

性のある道具。軟らかくて熱をもった脂
ばんを使うことで地金が固定され、成形
しやすくなる。脂は温度によって硬度が
変化するため、微妙な温度管理が作品づ
くりには欠かせない。夏は硬め、冬は軟
らかめにと、指導はまず脂の作り方から
始まったという。
そして、雲の模様の打出しから、牡丹・
菊などの花や、雀・鶴などの鳥、龍、獅子
と難度の高い打出しへ。
「銅板は厚さ1ミリ。この板金に無理
をかけず、破らずにいかに模様を入れて、
立体感を出すか。鑿を選び、表面の凹凸
を想像しながら裏から打出していくのが
この技法の妙」と津田さんはいふ。見
本を作ってもらい、それに近づけるよう
に鑿を打つ中山さん。銅板が冷えて硬く
なってきたら脂ばんから外し、火で熱し、
なましてから再び脂ばんの上に置いて
鑿を打つ。この作業が根気よく繰り返さ

● 銅器・彫金(銑金具)
津田興世(育成者)



中山裕晃(継承者)



中山さんの練習作品。
龍の打出し。



獅子の打出し金具
(津田興世)

津田 興世

昭和15年 高岡市生まれ

昭和35年より、父弥作に師事し、脂打出し、彫金技術等習得。手打ちによる銅、真鍮、銀等の板を脂出し技法により、立体的に表現し、高岡仏壇の柱巻や段淵金具または神輿や曳山の銑金具製作・補修にあたる。

平成13年 伝統的工芸品産業功労者表彰

平成14年 高岡市伝統工芸産業技術保持者指定

平成15年 全国金・銀創作展 東京都知事賞

れていく。
指導では、真鍮で課題として高岡御車
山の車輪銑金具の一部を試作。平板が立
体的な作品に変わる様子は、まるで地金
に命が吹き込まれていくようだ。「脂打
出しで帯留など装飾品、細工物の制作に
取り組み、高岡銅器の新たな魅力を発信
していきたい」と中山さん。
脂打出しの技法を代表するのは、高岡
仏壇の柱巻や段淵金具、御車山の車輪を
華麗に彩る銑金具。津田さんは、中山さ
んなら若手の職人に技が継承され、御車山
の銑金具の修復などに携わってもらっ
ていく。

※7基の山車が毎年5月1日に市内を巡行する。金工・漆工など優れた工芸技術が施され、重要有形無形民俗文化財に指定されている。